

経歴

平成2年	4月	郵政省採用	平成16年	7月	ハーバード大学国際問題研究所 客員研究員
平成2年	7月	同 貯金局営業課	平成17年	6月	総務省情報通信政策局 情報通信政策課課長補佐
平成4年	6月	英国留学(LSE)	平成17年	8月	同 情報通信政策研究所 調査研究部長
平成5年	7月	郵政省郵務局国際課開発係長	平成19年	10月	同 総合通信基盤局国際部 国際政策課企画官
平成7年	7月	同 通信政策局宇宙通信政策課 政策係長 兼 通信政策局政策課	平成20年	7月	同 情報流通行政局郵政 行政部郵便課国際企画室長
平成8年	5月	在ヨルダン日本国大使館一等書記官	平成21年	7月	同 総合通信基盤局 総務課調査官(兼国際政策課)
平成11年	7月	郵政省郵政研究所研究交流課長	平成23年	7月	現職
平成13年	7月	総務省総合通信基盤局国際部 国際政策課国際機関室課長補佐			
平成16年	1月	同 総合通信基盤局国際部 国際政策課課長補佐(統括補佐)			

未来に向けて歴史を創る

総務省情報通信国際戦略局国際経済課長 近藤 勝則

大学を卒業し、どのような職業を選び、どのような分野で働くのか。あるいは自分で新たな市場を開拓し、ビジネスを立ち上げるのか。いずれ皆さんは決断して前に進んで行くこととなります。たくさんの情報があり、友人のアドバイスや、自分のやりたいこと、社会的なイメージなど気になることはいろいろありますね。

ちりも積もれば山となる。

今日、電車のどの車両に乗りましたか。朝ご飯に何を食べましたか(あるいは食べないと決めましたか)。昨日、どのテレビ番組を見ましたか。米国の研究者によれば平均的な人は1日に70回なんらかの「決断」を下しているそうです。ということは、1週間で490回、1年間で2万5000回です。私の場合だと社会人になってから50万回以上の決断を下してきたこととなります。そうした連続した決断の結晶が今の自分であり、その中には過去の自分の決断と行動とその結果がすべて詰まっているわけです。

歴史も同様です。歴史という言葉はすでに過ぎ去って凝固したものを想起させるニュアンスがありますが、現在は歴史の最先端であり、歴史は活火山として活動しているものです。そして、歴史は個人の集合体としての社会が決断し、行動してきた結果を背負っているわけです。

未来への責任

国家公務員という仕事は、日々の決断とその結果を、単に自分が担わなければならないというだけではなく、社会として担うことに直結する仕事です。つまりあなたの業務上の決断は、社会の歴史の最先端で未来へのメッセージを形作るものとなるのです。あなたは10年後、20年後の自分に、50年後の

次世代に、100年後の歴史家に、1000年後の人類にどんなメッセージを残しますか。残したいですか。それを考えることを仕事とするのが国家公務員です。

もちろん日常の中で些細に思える決断があるように、国家公務員としての日常の決断もすべてが脚光を浴びるものではないかもしれませんが。しかしみなさんの過去の決断という1つ1つの細胞が今の自分を形作っているように、行政官としての判断は確実に社会を形成していきます。

21世紀の歴史を創りましょう。

いまはまさに職業の選択という形で未来の自分へのメッセージを自分で考えているところですね。悩みはつきません。パイロッ



執筆中の筆者

トになるなら医者というわけにはいかないし、教師の職を全うするのであればベンチャーの旗手というわけにはいかない。国家公務員になるなら銀行員ではないし、総務省に入省するならX省ではないわけです。その決断をするにあたってこの冊子を手にとり、国家公務員は職業として選択するに値するのか、役所として総務省を選択したら未来の自分は満足してくれるかどうか、瀬戸際にいるわけです。答えは自分の中にあります。決断は日常生活の中にあるし、一生続きます。自らの決断の結果を背負い、担っていく覚悟をもって総務省の門を叩いていただければ、同じ決断をした者同士として、おいおい未来の歴史について語り合いたいと思います。そのときをお待ちしています。

経歴

平成9年	4月	郵政省採用
平成9年	8月	同 電気通信局電気通信事業部事業政策課
平成11年	7月	同 大臣官房人事部人事課人材開発室
平成12年	7月	大蔵省大臣官房総合政策課調査第二係長
平成13年	1月	財務省大臣官房総合政策課調査第二係長
平成14年	8月	総務省大臣官房企画課企画調査第五係長
平成15年	8月	同 総合通信基盤局総務課課長補佐
平成16年	7月	同 総合通信基盤局国際部国際政策課国際機関室課長補佐
平成17年	8月	同 郵政行政局郵便企画課国際企画室課長補佐
平成18年	8月	同 郵政行政局保険企画課課長補佐 併任 信書便事業課
平成19年	8月	同 郵政行政局信書便事業課課長補佐
平成20年	7月	同 情報流通行政局情報通信利用促進課課長補佐
平成21年	4月	現職

広がる可能性を信じて

和歌山県企画部企画政策局情報政策課長 清水 久子

15年を経て、感謝の気持ち

総務省に入省して15年。20代から、気がつけば30代後半。15年の時間の多くがやはり仕事で占められ、改めて振り返れば、仕事を通して自分自身が変貌をとげてきました。これまで、たくさんの職場の方々から助けて頂いたこと、すばらしい先輩方が、仕事への姿勢も含めて、私に必要なことを教え伝えてくださったことに、感謝しています。

我々にとってコミュニケーションとは、感情、意思、情報などを、伝えあい、受け取りあうこと。ある人が伝えたことは、別の人が受け取り、そして新しい何かを生み出す動きをつくりだす。人を支え、励まし、前進していくことができるようになる。

総務省で、先輩方から伝えられたことで成長してこられたことに感謝すると同時に、誰かを支え前進させる契機ともなるコミュニケーションを豊かにする仕事に携わってこられたことに、心から感謝しています。

和歌山県での勤務

平成21年4月から和歌山県情報政策課に赴任しました。制度に基づき、政策を推進する総務省を出て、地域により近い立場で情報化施策の推進にあたっています。

例えば、携帯電話のサービスエリア拡大。携帯電話は、もはや我々の生活の一部になっているといってもいいほどですが、山間部など、地理的条件が厳しく人口も少ない集落では、今でも携帯電話がつかない地区があるのです。例えば、人口が10人に満たない集落では、サービスの採算は非常に困難ですが、住民の方々の「利用したい」というニーズがあるなら、何とか応えてあげられないものか、通信会社や市町村の方々の間にたって、知恵を振り絞っていかねばなりません。

そして、2011年7月に完全移行を果たし

た地上デジタル放送(地デジ)。アナログを受信していたテレビのままではデジタル放送は受信できず、利用者が自ら、地デジ対応テレビを買い換え、あるいはチューナーを買い足し、必要となればアンテナ改修をしなければなりません。加えて、これまた山間部では、単純に家の屋根の上にアンテナをあげてもテレビが受信できず、見通しのいい地点でテレビ波を受信し、それをふもとの複数の世帯へ送ることで、共同してテレビが視聴できるようにしているのですが、この施設も、改修しなければなりません。改修には費用がかかりますし、地理的条件が厳しいほどに、その負担は重くなります。それでも、総務省の支援策を活用し、何とか前進していったのは、テレビがみたいという住民の皆様のお気持ちゆえだったと思います。

その地デジのデータ放送を利用して、地域の防災情報提供にも取り組みました。防災行政無線は、緊急時の情報伝達手段として極めて重要な役割を果たしますが、気象状況等によって、屋内では聞き取りづらく、その補完手段として、防災行政無線で流す内容をデータ放送に反映し、テレビから知ることができるようになりました。台風被害のあった和歌山ですので、防災意識は益々高まっています。必

要な情報が少しでも早く皆様に届くよう、行政として、たとえ小さくとも新たな取り組みを進めるのは、とてもやりがいのあることです。

インターネットを駆使し、便利な生活を送っていても、ふと見渡せば、情報を伝えたい、知りたい、その情報を生活の中で活かしたいという思いは、様々な形で地域に残されています。それに応えていくべく、どういう支援策、制度がありうるのか、適切なものか。情報化の推進役として総務省が担うべき役割は、今までも、そしてこれからも非常に重要なものだ改めて感じます。

広がる可能性を信じて

これから社会人となっていく皆さんには、たくさんの広がる可能性があります。そして、ICT(情報通信技術)は、医療、教育、環境など、様々な分野において新たな可能性を拓きつつあります。

皆さんの将来がすばらしいものになるように、人生の大きな節目となる就職ですから、少しでも皆さんの選択肢にふれてみてください。そして、皆さんと同じように広がる可能性をもつICTに興味を抱いて頂けるなら、ぜひ、いらしてください。総務省で、お待ちしております。

